

CONTENTS ◆早春のつどいレポート1 ◆おくさわ今と昔 ◆奥沢の歴史を訪ねて  
◆早春のつどいレポート2 ◆活動報告 ◆会からのお知らせ

### 早春のつどいレポート1

## お話 「奥沢城址・鷺草伝説」

世田谷区で昨年第3回地域風景資産推薦受付があった。「土とみどりを守る会」では既に奥沢海軍ゆかりの風景と大ケヤキのある散歩道一けやき道の2ヶ所が選定されている。

そこで第3回の今回は物よりもいつか消えてなくなるかもしれない文化的な遺産に目を付けたのだが、それが400年前の出来事を今に伝える説話文学の『名残常盤記』(なごりのときわき)だ。一般には「鷺草伝説」とか「鷺草物語」とか呼ばれている。

この話を全部していると何ページあっても足りない。早春のつどい1時間使っても話し足りなかった。この話は戦国時代末期の頃、世田谷区の多くを治めていた吉良氏(忠臣蔵の吉良氏及び今川氏とは室町時代前期に兄弟の関係)最後の殿様吉良頼康とその侍大将格であった奥沢城主大平出羽守の娘常盤姫(19歳・大平清九郎の妹といわれている)との悲恋物語である。

頼康に見初められた常盤姫は13番目の側室となり一人可愛がられた。嫉妬した側室達の讒言により家来との不倫を疑われ頼康の怒りを買う。気づいた常盤姫は大山道を逃げ、途中自分が帰依して建てた常在寺の井戸に櫛を投げ、その後覚悟の死を遂げる。

そのお墓が常盤塚で既に世田谷百景に指定されている。その後お腹の中の子に吉良家の家紋が見えたので我が子と気づいた頼康は、駒留八幡(世田谷百景)に若宮を作り祀った。また、そこには巖島神社と呼ばれていた田中弁財天も小さな社を構え常盤姫を祀り今は琵琶の模型が奉じられている。

12人の側室は死を命じられ、常盤塚の先に点々と埋葬され十二塚と呼ばれたが今は道路工事で全て削られてしまった。明治には未だ残っていたらしい。この話の中に鷺草や鳥のサギがでてくるのだが、内容の異なる伝説がたくさん伝えられている。

この話は一応創作ということになっている。しかし、出てくる地名も人物も全て実在していたといわれている。もしかすると元になった出来事があったのかも知れない—と考えるのもロマンを呼ぶ。作者は不明だが、江戸の前期ぐらいに作られたらしい。文章もしっかりしており、平家物語を手本にしたのではと私は思っている。どうも常盤姫ゆかりの勝光院の僧侶か或いは代官屋敷の武士や村の年寄り・名主クラスによるらしい。元の話は「勝光院薬師佛縁起」に書かれているが写本しか残っていない。これを元にして書かれたのが『名残常盤記』であるが、現在代官だった大場家、奥沢城主大平家の子孫(等々力大平農園他)、北川家等の写本が伝わっている。

常盤姫が生まれ育ったのが現九品仏浄真寺の奥沢城址であり、当時奥沢の谷筋に広く咲いていた可憐な鷺草を見てこんな物語を作ったのかも知れない。琵琶の音とともにいつか子どもたちと奥沢城址で琵琶法師が弾き語る鷺草物語を聞いてみたい。(赤松)



# おくさわ今と昔

(このシリーズでは奥沢に長くお住まいの方、新しく移ってきた方々など、毎回住民の方が登場し、この街にちなんだエピソードを語っていただきます。)

## 「関誠三郎さんを偲ぶ」

奥沢2丁目 鈴木 仁 (理事事務局長)



本年1月奥沢2丁目にお住まいの関誠三郎さんが102歳で亡くなりました。心よりご冥福をお祈り申し上げます。

大ケヤキのある散歩道のほぼ真ん中、大きなヤマモモとサザンカの生垣のある関さんのお家は、お向かいのスタジオとアカメモチの生垣のある平井さんのお家と対をなして昔ながらの奥沢らしい風景を形作っています。

関さんと知り合ったのは、小生が入会后間もなくの「秋のつどい」で講演を聴いてからでした。その頃関さんは、もう95歳以上でしたが毎朝ご自宅から一人で奥沢交和会館の前まで歩き、会社までタクシーに乗っておられました。会館のすぐ裏手に住む私を見つけると笑顔で声をかけてくださる気さくな会長さんでした。やがて自宅前から出るタクシーから笑顔でご挨拶を頂きましたが、最近はお会いしていませんでした。

設立後まだ日の浅い当会の活動に深い理解を示され、つどいでお話頂いたり、会社の食育についての研究所にお招き頂き食のセミナーと楽しい食事会をして下さいました。お話では会社の経営姿勢が印象的でした。



食のセミナー 2004.9

関さんの会社は企業等から職場の集団給食を専門に請け負う事業を行っています。操業は昭和13年で当時はこの業種はなく今でいうベンチャー企業だったそうです。軌道に乗るまでの運転資金の確保や、戦前の米の配給制度化や、戦後のオイルショックの時の食材供給危機を、従業員、業者や顧客への誠意ある対応で解決しながら順調に業績を伸ばしてきたそうです。この間関さんは会社のあり方、会社は誰のためにあるのか・・・を考え続けてきました。

結論は、関さんの自著のタイトルでもある「会社の心」でした。会社は、株主、社員、社会の何れの

ためにもあるということ、関さんは愚直に実践してこられたのです。企業利益の半分は税金にあて、残り半分の利益のうち約9割を積立金に当て、残りを配当・役員賞与としています。積立金もその一部は食育の研究所のような社会啓蒙のために当てられたそうです。因みに会社は納税優良申告法人第1号に認定されたそうです。

この経営哲学は「日本資本主義の父」と言われた渋沢栄一の考え方を取り入れたものだったようで、渋沢栄一の言葉「国家社会のために尽くすのは、すなわち天の使命を行うものである」という信念があるならば、よし一身一家の利益を犠牲にすることがあっても、むしろ愉快に感じこそすれ、苦痛に感ずる筈はない。」を引用しています。

関さんのお祖母さんは渋沢家の女中頭だったという縁があり、関さんも若い頃から影響を受けていたようです。

今時のグローバル企業でゼニ儲けだけに走り、経営のおかしくなったどこかの大企業さんに聞かしてやりたいお話ですね。

渋沢さんと言えば大正時代の末に大都市化しつつあった東京の郊外に、新しい生活拠点の確保を目指し当時の欧米でも最新の田園都市構想を導入し、田園調布や洗足開発を行った経営者でもあります。やがてこれに啓発された旧玉川村(今の玉川地域)の後に村長となる豊田正治がリードする民間ベースの「玉川全円耕地整理」事業により、東は奥沢から西の用賀に至るまで殆どの地域が碁盤の目状の道路で構成され玉川地域らしい景観が形成されています。この元を築いた渋沢栄一と奥沢2丁目に住まわれた関誠三郎さんが、同じ地域であったことに住民として一つの感慨を覚えています。



関邸のヤマモモと大ケヤキ道 2008.5

## 奥沢の歴史を訪ねてⅣ 常磐姫の頃以前の奥沢①

丁度今地域風景資産の選定で、『奥沢城址をめぐる鷺草伝説』を推薦、主に鷺草伝説について書いたので、此处では歴史的事実について書いてみたい。

奥沢では九品仏駅東側に奥沢台遺跡がある。もう既に二十数回発掘が繰り返されている。先日区役所で小さな小さな展示会が開かれた。一応本会でも見に行き撮影してきたのでミニ園遊会に展示したい。

そこを中心に諏訪山遺跡・浄真寺境内遺跡他いくつかの散在遺跡がまわりにある。いずれも縄文前期～後期の時代で古い時代はない。しかし、そこで忽然と消えてしまい、弥生時代以降が見当たらない。これは多分奥沢が草地・竹林を中心にした荒れ地で、狩猟生活の縄文時代は生活出来るが、農耕文化の弥生人にとっては水田を作るところが殆ど無く住みようがなかったからであろう。

荒れ地は奥沢だけでなく武蔵野台地全体がそうであり、江戸時代でさえ農民は喘いでいた。最大の原因は地下水面が深く水が得られないことである。玉川地域の農民は自分のところを流れる呑川の水さえ自由に使えなかったことは意外と知られていない。

街歩きで桜新町に行った時品川上水跡地見学の中で話す事が出来た。原因は大木屋敷と天領である大田区六郷の豊かな水田にあった。

やがて古墳時代になると関東は南北に有力な国ができ、大和朝廷の役人が仕切るようになった。その南の勢力の主が亀甲山古墳に埋葬されていると考えられている。その後も宝来古墳や観音塚古墳を始め多数の円墳をまとめて古墳群を作っている。この頃には奥沢では九品仏川（丑川ウシカワ）の鷺の谷や浄真寺裏あたりで細々と始めていたのであろう。

九品仏川の数軒の農家は別として、奥沢の台地に初めて歴史に残る形で入ってきたのは誰であろう。奥沢神社発行の郷土史「おくさわ」（竹内秀雄執筆、後日編集に携わった鈴木宗氏は当時氏子総代で奥沢郷土史会の会長さん）によれば、頼朝の奥州攻めに際し義経討伐を諫めた天野茂右エ門が容れられなかったので、浪人して大恩寺付近で病に倒れこの地に留まったという。また、北条氏に滅ぼされた和田一族の一部が流れてこの地にやってきて家臣団約20人と居着いたとも言われている。その時の和田

（私たちの住むまち奥沢の成り立ちはどうだったのでしょうか、調査結果をシリーズで紹介いたします。）

氏と家臣団の子孫は現在も在住しておられる。この辺りの話は書物を読み、人から話を聞かされるだけでまだ自分では調べてはいない。このときの約20軒はそのまま奥沢村→奥沢本村となり、明治になる迄続く。江戸時代中期に奥沢新田の農民の願い出により幕府から奥沢城址の使用を許され浄真寺が出来ることになる。

吉良家が上野国飽間（アキマ）から世田谷に入ったのが14世紀である。城自体はそれ以前からあったのかも知れない。奥沢城についても全く記録が残っていないのでいつ頃出来たのかわかっていない。2つの城の話は次回にまた。 （赤松）



浄真寺総門

奥沢城址の土塁



奥沢城址の土塁



奥沢城址の土塁



奥沢城址の土塁



# おくさわコンサート♪ 北原白秋を歌う

今回のおくさわコンサートは一番多くご出演していただいているアコーディオン漫謡の岩田百郎さんです。

アコーディオンを胸にした岩田さんの登場に全員が小冊子を開きさあ歌うぞと心構える。

岩田さんは「歌う前にする事があります。アカンベーと言いつつ舌を前に出す・ウーンと言いつつ鼻の先にくつつくぐらいに舌を伸ばす。そして口を大きく開けて舌を左右に動かしましょう」。岩田さんと一緒に口と舌を動かして歌う準備をする。

歌うのは北原白秋の童謡で1曲目は「雨」雨がふります～と小さな声で歌い始める。

「歌うと血液の循環がよくなり脳の活性化につながり帰ったら湯船で歌ってしまいますよ。歌い終わったら私のためではなく自分に拍手をしましょう」。と岩田さんが言う。

2曲目の「あめふり」になると少しづつ声が大き

くなる。そして自分のために拍手をする。

「この道」「揺籃のうた」と続き次の「砂山」について「日本の民謡のような中山晋平作曲とクラシックの人が歌いあげて欲しいような山田耕筰作曲。2人の作曲の違いを感じて」。と岩田さんの漫談が1曲づつに入る。「あわて床屋」「ペチカ」「待ちぼうけ」「からたちの花」「赤い鳥小鳥」。小冊子の童謡を全て歌い終了時間となる。

「楽しかった!」。温かい雰囲気の中で全員の満足した顔が物語っていたのであった。(遠藤)



## 活動報告

●2月10日の「早春のつどい」で、平成24年度地域の絆推進事業「街の落ち葉掃きプロジェクト」総括報告をさせていただきました。プロジェクト3年目を迎え、落ち葉掃きの地域拡大、落ち葉からの土づくり、更に落ち葉や樹木に関わる文化交流活動を通して、2丁目主体であった当会の活動は、1丁目、3丁目へ、お付き合いの仲間も町会（交和会）、学校（奥沢小）へと広がりました。皆さまのご協力の賜物と有り難く思います。今後の落ち葉掃きの課題は町会や学校の方々に重い負担をお掛けせずに、落ち葉の多い街区の方々との連携を築き、自主的な日常のクリーン化活動に発展させることと思います。

●第3回地域風景資産選定活動に当会は「奥沢城址をめぐる鷺草伝説」と銘打って推薦し、歴史や伝説を共有する新たな風景づくりを展開しようとしています。今回もお馴染みの少ない奥沢4から8丁目で、浄真寺や鷺草学舎（八幡中、八幡小、九品仏小）等地域のグループとご一緒に進めていきますので、皆様の参加をお待ちしています。

## 会からのお知らせ

●ミニ園遊会を、5月19日（日）11時30分（雨天の時は翌日）より奥沢2-32-15のいつもの空地をお借りして開催します。皆様のお越しをお待ちしています。

●NPO法人土とみどりを守る会の総会を、ミニ園遊会に先立ち10時30分から開催します。会員の皆様には出欠の葉書をお送りしましたので、総会欠席の場合は委任状に捺印の上ご返送下さい。19日雨の場合は、20日に延期、20日も雨の時は奥沢東地区会館で行います。

●土とみどりを守る会はいつでも新会員を募集しています。会の活動を支える年会費は1口1,000円です。活動に直接参加されなくても、会活動を継続的にご支援頂けると幸いです。どうぞ御協力をお願い致します。入会のご連絡は下記へどうぞ。

土とみどりを守る会 連絡先

世田谷区奥沢 2-32-11 堀内正弘 5701-5901

世田谷区奥沢 2-19-9 長瀬雅義 5729-0126

世田谷区奥沢 2-18-6 鈴木 仁 3723-6659

ホームページ : <http://tsuchimidori.net>

e-mail : [info@tsuchimidori.net](mailto:info@tsuchimidori.net)